子育て支援者がとらえる親子の成長

―子ども広場の子育て支援者へのアンケート調査から―

丸　谷　充　子※

要約

子育て支援においては、親と子の双方への支援が求められ、支援が効果的であるためには支援の担い手である子育て支援者の存在が大きいと考えられる。本研究では地域子育て支援拠点事業の一つである子ども広場の子育て支援者が、親子が成長することをどのようにとらえているかを探索的に調査検討することを通して、子育て支援者の支援について考察した。

データ解析には、樋口（2011）による計量テキスト分析システムKH Coder（Ver.2.Beta.30f）を用いて分析を行った。子育て支援者は、「愛情ある養育で深まる絆」「関係の中で親子が育ち合う」「家族の生活の中で育つ」「赤ちゃんの反応から親が育つ」「親子で社会に適応する」「コミュニケーションにより心が育つ」の６次元で親子の成長をとらえ、子どもの乳児期から、親から独立するまでの長いスパンでの視点で支援を行っていることが明らかになった。

キーワード　地域子育て支援拠点事業、子育て支援者、親子の成長、
子育て支援、テキストマイニング

目次

１．問題と目的
　１．１　子育て家庭の現状
　１．２　子育て支援の変遷
　１．３　地域子育て支援拠点事業
　１．４　Ａ市の取り組み
　１．５　子育て支援の目的
２．研究方法
　２．１　調査日時及び対象
　２．２　調査内容
　２．３　分析方法
　２．４　倫理的配慮
３．結果
　３．１　対象者の属性
　３．２　形態素の出現頻度
　３．３　共起ネットワーク分析
　３．４　階層的クラスター分析
　３．５　共起ネットワークと階層的クラスター分析の共通部分
４．考察
５．まとめ
６．今後の課題

※浦和大学　こども学部

１．問題と目的

１．１　子育て家庭の現状

近年、子育てを負担に感じることは特別な感情ではなく、ごく普通に生活している母親も「子育ては辛い」「わが子をかわいく思えない」といった感情を持つことが、広く知られるようになった[1][2]。背景として、女性の就業率の高まりなど、ライフスタイルの変化、親自身が子どもに関わる経験が少ないことによる養育力の不足、地域とのかかわりの薄さなどの地域の養育力の低下などの要因がある。結婚・出産までは、仕事を持ち、結婚または出産しても仕事を続ける、またはいったん退職するが再び仕事を持ちたいと考えている女性が約65％という結果もあり、子どもを持つ女性の生活が子育て中心ではなくなってきている[3]。子育てが始まってみると、女性だけでなく夫婦にとって、子どもを持つ前とは生活が一変し、これまでの生活で身に着ける機会が少なかった子どもに関わる力と、子育てや支援に関する情報を使いこなす力が求められる。子育てに追われる日々に疲弊してしまい、わが子を愛おしく思う心の余裕が持てない親もいる。０才から２才までの子育て家庭の７割が在宅で子育てをしており、子育て初期の親は子育てへの戸惑いや負担感を抱えて孤立しやすい状況にあると言える[4]。

１．２　子育て支援施策

1989年、合計特殊出生率が過去最低値を記録した「1.57ショック」により少子化が社会問題となり、少子化の流れを変えるため、厚生労働省は少子化対策として、次々と施策を打ち出してきた[5]。

1995年の「エンゼルプラン」から2002年の「少子化対策プラスワン」までは、専業主婦である母親中心の育児から、仕事と家庭の両立支援、子育てのコスト削減などの体制作りがすすめられ、「少子化対策プラスワン」では、父親が子育てに参加できるよう行政、企業、地域の社会全体での支援が必要と位置づけた[6][7]。2003年「次世代育成支援対策推進法」では、自治体による支援として、次世代の親づくりの視点、サービスの質の視点があげられるようになった[8]。2004年「子ども・子育て応援プラン」では、従来の保育事業中心の子育て支援から、若者の自立・教育、働き方の見直し、地域づくりなど、新たな支え合いと連携を重点課題とした[9]。2006年から2010年には「ワーク・ライフ・バランス」と「子ども・子育てを応援する社会」の実現へと視点を変え、仕事と家庭の両立から、「働き方の見直しによる仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現」と、その社会的基盤として「包括的な次世代育成支援の枠組みの構築」を進めていく必要があるとして[10]、2010年「子ども・子育てビジョン」[11]では、子育てを社会全体で支えるためのより具体的な施策が挙げられた。田中[12]は、子育て支援施策の課題として、必要な所に支援が行き届いていないこと、必要な支援が不足していること、地域で育つ子どもとその親に対する支援が未だ不足していることをあげ、今後の支援の方向性について、日常的に気軽に利用できる支援活動の

場の一つとして親子が自由に過ごせる「ひろば」の充実を挙げている。

１．３　地域子育て支援拠点事業

2015年４月から本格的に施行されている「子ども・子育て支援新制度」では、子どもを産み育てやすい社会の実現を目指すために、子育て支援の質・量の両面にわたる拡充を図ることとなった。実施主体が市区町村となり、地域の実情やニーズを踏まえて、妊娠期からの支援を行うことが特徴であり、在宅での子育て家庭に対しては、「地域子育て支援拠点事業」「一時預かり事業」などを中心として、支援の充実が図られることとなった[13]。地域子育て支援拠点事業は、厚生労働省の定める、公共施設、保育所、児童館等の地域の身近な場所で、乳幼児のいる子育て中の親子が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業であり、「一般型」「連携型」「地域機能強化型」がある。「一般型」と「連携型」においては、ＮＰＯなど多様な主体の参画による地域の支え合い、子育て中の当事者による支え合いにより、地域の子育て力の向上を目指すもので、従事者としては子育て中の親子の支援に関して意欲があり、子育てに関する知識と経験を有する者が想定されている。「地域機能強化型」においては、育児・保育について相当の知識・経験を有し、地域の子育て事情や社会資源に精通する者が想定され、これまでの当事者性に加えて支援者としての専門性の強化が求められるようになった[14]。

１．４　Ａ市の取り組み

Ａ市では、地域子育て拠点支援事業として、子育て中の親子の交流や育児相談などの子育て支援と小・中学生の遊びの場の提供を目的として、地域センターなど地域の身近な場所で「子ども広場事業」を実施している。週に５日、午前10時～午後６時（午後５時までの広場もあり）、子育てに関する相談や助言、地域の子育て情報の提供、子育て中の保護者の交流、乳幼児の親子のつどいの場の提供、子育てのための講習会や講座の開催、中学生までの子どもの遊び場の提供、遊びの指導などを行っている。子育て支援者は、日常的に親子にかかわり、子どもの育ちを援助すると同時に、子育てを担っている親に対してもさまざまな取り組みと配慮をもって支援を行っている。子ども広場を訪れた親子は、子育て支援者に見守られながら、親子で遊ぶ、他の親子と交流を持つ、子育て支援者に子育ての相談をするなど自由に過ごすことができる。

１．５　子育て支援の目的

子育て支援の施策を概観すると、支援の受け手は乳幼児から中高生、親世代と幅広い対象であり、支援をする側も子育て経験者から専門的な知識を有する者までさまざまな立場がある。大豆生田（2007）は、子育て支援に対してなされる主張は、子育て支援を行っている場や職種の違いと、「個々の『子育て』という行為や営みに対する現状認識や価値意識の違いによるものが大きいであろう」と述べており、支援の現場において根幹となる支援の目的

が共有されていない可能性を示唆している[15]。太田（2002）は、子育て支援を、①親を子育ての主体として位置づけ、②社会のすべての人が協力することによって、③親が安心して子育てをしながら親として成長することを支え、同時に④子どもの健やかな成長を促す、という４つの視点から、親と子が同時に成長することを支援することであると述べている[16]。大豆生田は、「親を単体としてとらえるのではなく、『親子』ユニットとしてとらえる方が実態に即している」と述べ[17]、親・家族への支援として、「親が親として育つための支援」「親子関係や家族関係への支援」を挙げている[18]。松島（2008）は、「『子が生まれて、親が生まれる。２人は同い年』仏法説話にみられるこの言葉には、親と子の不思議な、そして深遠なつながりが暗示されている」と、乳児期の子育て支援において、親子をまとまりとしてとらえる視点が必要であり、親子の心理発達支援、親子関係形成の支援が必要であると述べている[19]。那須川（2013）は、子育て支援の目的を、「時代を担う幼児がすくすくとふさわしい生活のなかで健全な成長発達を遂げられるような保障をすることである」「保護者を支援することは、すなわちその中で育つ幼児の発達を支援することでもある。また、それは親子セットで考慮されるべきことであり、幼児の成長とともに親も同じくその年齢の幼児にふさわしく成長していくものである」と、親子をセットで考え、親となってからの年数にふさわしく親が成長していくことを支援することであると述べている[20]。

これらの研究者の視点を概観すると、時々の施策、支援の場、個々の支援者の意識の違いによっての焦点は異なっても、子育て支援は、親だけ、子どもだけを対象とするのではなく、親子が共に健やかに成長するための支援であることは共通していると思われる。

そこで、Ａ市子ども広場の子育て支援者を対象として、子育て支援者が、親子が成長することをどのようにとらえているかを探索的に調査し、検討することとした。

２．研究方法

２．１　調査日時及び対象

2013年８月、Ａ市社会福祉協議会が運営する子ども広場で乳幼児の親子、小学生、中学生に対して支援を行う子育て支援者に対してアンケートを作成し、実施した。Ａ市社会福祉協議会つどいのひろば事業主管課の担当職員より調査対象者に対し、口頭で調査の趣旨を説明し調査票を配布していただいた。自宅、または職場で記入していただき、後日、調査対象者全員が出勤する研修日に筆者が対面で回収を行った。対象者24名のうち調査の趣旨に賛同し回答が得られた23名について分析を行った。

２．２　調査内容

質問紙による自由記述形式のアンケート調査を実施した。支援者の属性として、①年代、②支援者としての経験年数、③これまで経験した支援内容、の３項目を調査した。内容は、①子どもが成長・発達するとはどのような事を意味すると思いますか、②大人が成長・発達するとはどのような事を意味すると思いますか、③親になった人が成長・発達するとはどの

ような事を意味すると思いますか、④親子が成長・発達するとはどのような事を意味すると思いますか、⑤あなたが支援者として成長・発達したと思う事をできるだけたくさんあげてください、⑥親子の支援について、あなたが知っているものをあげてください、⑦⑥で挙げた支援の他に、乳幼児の親にとってどのような支援があれば有効だと思いますか、⑧その他、アンケートを記入されていて感じたことを自由にお書きください、の８項目からなる。子育て支援者がどのような発達観を持って親子と接しているのかをとらえることを目的とした調査で現在順次分析を行っている。本稿では、④親子が成長・発達するとはどのような事を意味すると思いますか、の項目について分析を行った。

２．３　分析方法

テキストマイニングの手法を用いて自由記述のデータを解析した。テキストマイニングとは定型化されていない文章の集まりを単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析して有用な情報を抽出する手法で、テキストマイニングのソフトにはKH Coder（Ver.２.Beta.30f）を用いた。分析方法は先行研究にならい、初めに全単語の頻出順、品詞ごとの頻出順のリストを作成し、次に全体的な傾向を見るために共起ネットワーク図を作成し、階層的クラスター分析を行い、その傾向を把握して考察を行った[21][22]。

２．４　倫理的配慮

筆者が対面で回収することで回答者以外が内容に関知できないようにした。論文や発表等で調査対象者個人が特定されることはなく、調査対象者の個人情報やプライバシーを侵すことはないこと、得られたデータは研究以外の目的で使用しないこと、アンケートの回答をもって研究への同意とすることを口頭で説明し同意を得た。その後、収集したデータを分析する際および結果を公開する際には、データをコード化するなど個人が特定されないように配慮した。

３．結果

３．１　対象者の属性

回答が得られた23名は、女性22名、男性１名であった。対象者の年代と経験年数は以下の通りであった。

表１　子育て支援者の年代と経験年数

経験年数	20代	30代	40代	50代	計
１～３年	1		4		5
３～５年			2	5	7
５～10年		1	1	4	6
10年以上			3	2	5
計	1	1	10	11	23

３．２　形態素の出現頻度

23名分の記述された回答で得られた、「親子が成長・発達するとはどのような事を意味すると思いますか」の問いに関する回答の総抽出語は、1,004語、異なり語数279語であった。そのうち助詞や助動詞のように、どのような文章の中でも現れる一般的な語は分析から除外されるため、分析対象語は189語であった。抽出語リストを確認し、「名詞、サ変名詞、形容動詞、副詞可能、動詞、形容詞、副詞、名詞Ｂ、名詞Ｃ」を分析対象とした。どのようなコード名が抽出されたのか概観するために抽出された形態素のうち出現回数が２以上の52語について表２に示す。本稿では分析においてのJaccard係数、併合水準などから出現回数が３以上の30語を分析対象とした。次に出現回数が３以上の名詞23語を表３に示す。

表２　質問「親子が成長・発達するとはどのような事を意味すると思いますか」

No	抽出語	出現回数	No	抽出語	出現回数
1	子ども	22	31	いろいろ	2
2	親	19	31	育つ	2
3	親子	13	31	家庭	2
4	成長	11	31	確立	2
5	社会	10	31	学ぶ	2
6	人	9	31	基	2
7	生活	7	31	協力	2
8	お互い	6	31	刺激	2
8	愛情	6	31	子離れ	2
8	思う	6	31	自己	2
11	関係	5	31	自分	2
11	信頼	5	31	自立	2
13	コミュニケーション	4	31	笑う	2
13	関わり	4	31	世話	2
13	基本	4	31	生まれる	2
13	共に	4	31	促す	2
13	持つ	4	31	尊重	2
13	少し	4	31	他	2
13	心	4	31	大きい	2
13	赤ちゃん	4	31	段階	2
13	絆	4	31	日々	2
22	育てる	3	31	目	2
22	一緒	3			
22	家族	3			
22	見る	3			
22	深める	3			
22	人間	3			
22	適応	3			
22	発達	3			
22	反応	3			

抽出された形態素上位52語

表３　出現回数上位（名詞）

No.	名詞	出現回数
1	子ども	22
2	親	19
3	親子	13
4	成長	11
5	社会	10
6	人	9
7	生活	7
8	お互い	6
8	愛情	6
10	関係	5
10	信頼	5
12	コミュニケーション	4
12	関わり	4
12	基本	4
12	赤ちゃん	4
12	心	4
12	絆	4
19	一緒	3
19	適応	3
19	発達	3
19	反応	3
19	家族	3
19	人間	3

抽出された形態素のうち出現回数３回以上の上位23の語

３．３　共起ネットワーク分析（図１、表４）

出現数が３以上の語で分析した共起ネットワークを図１に示す。Jaccard係数の閾値は0.3に設定した。Jaccard係数は類似性の指標であり、単語間の共起関係を表すものとして広く使用されている。比較的強く結びついている部分を検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示すサブグラフ検出で表した。出現数の多いコードほど大きな円で描かれ、共起の程度が強いほどコードが太い線で結ばれることで、各コードの関連を示し、同じサブグラフに含まれるコードは実線で結ばれる。これらの手続きにより共起ネットワークでは、特に共起の程度が強いコードは、「親」と「子ども」、「赤ちゃん」と「反応」、「信頼」と「絆」、「家族」と「生活」、「発達」と「関わり」、「人」と「心」であった。実線で結ばれたグループは、①「絆」「信頼」「深める」「愛情」「育てる」、②「子ども」「親」「関係」、③「家族」「生活」「共に」、④「反応」「赤ちゃん」「思う」、⑤「発達」「関わり」「成長」、⑥「親子」「社会」、⑦「人」「心」「コミュニケーション」の7グループに分類された。点線で結ばれたグループ（隣り合う）は、①グループと②グループで「信頼」と「関係」がやや強い点線で結ばれ、④グループの「思う」は③グループの「家族」と⑤グループの「発達」と弱い点線で結ばれた。

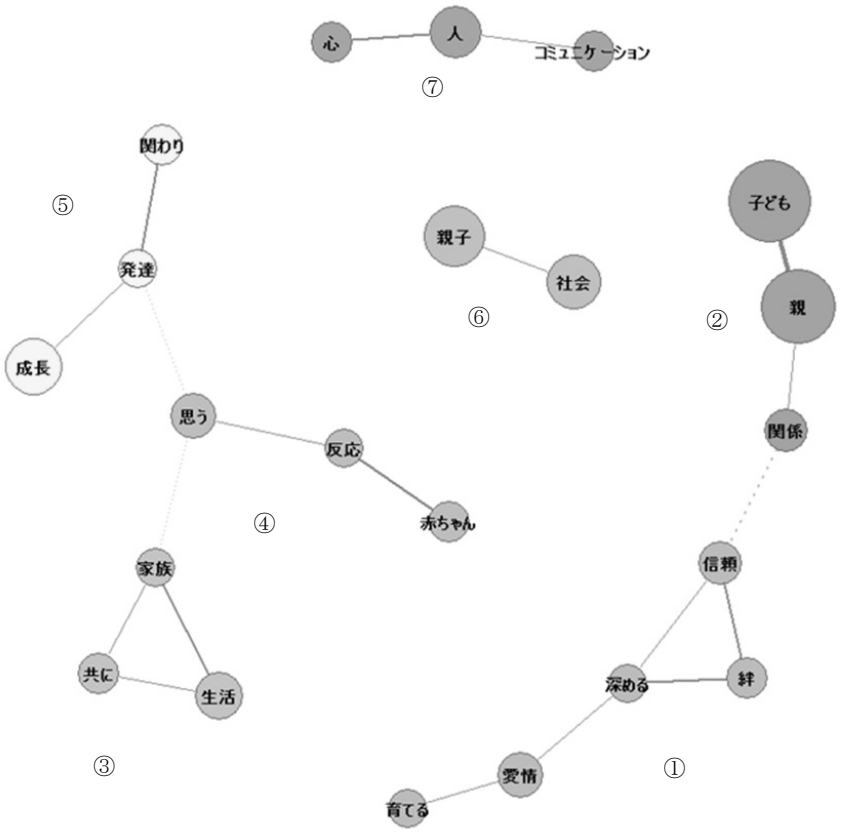

図１　共起ネットワーク（出現数３以上の語で分析）

表４　共起ネットワーク分析（サブグラフ分析）

実線による共起関係にあるグループと点線により隣り合うグループ	
①	「絆」「信頼」「深める」「愛情」「育てる」
②	「子ども」「親」「関係」
③	「家族」「生活」「共に」
④	「反応」「赤ちゃん」[思う」
⑤	「発達」「関わり」「成長」
⑥	「親子」「社会」
⑦	「人」「心」「コミュニケーション」

３．４　階層的クラスター分析（図２、表５）

共起ネットワークと同一の対象で、Ward法により階層的クラスター分析を行った。クラスターの結合距離を、併合水準（非類似度）のプロットの減衰状況から検討し、クラスター数を7として、30個のコード化された形態素の分析を行った（図２）。

クラスター１［深める－信頼－絆］、クラスター２［愛情－育てる－見る－少し］、クラスター３［一緒－関係－子ども－親］、クラスター４［共に－家族－生活－基本－人間］、クラスター５［人－心－待つ－お互い－コミュニケーション］、クラスター６［赤ちゃん－反応］、クラスター７［適応－親子－社会－関わり－発達－成長－思う］と分類された。

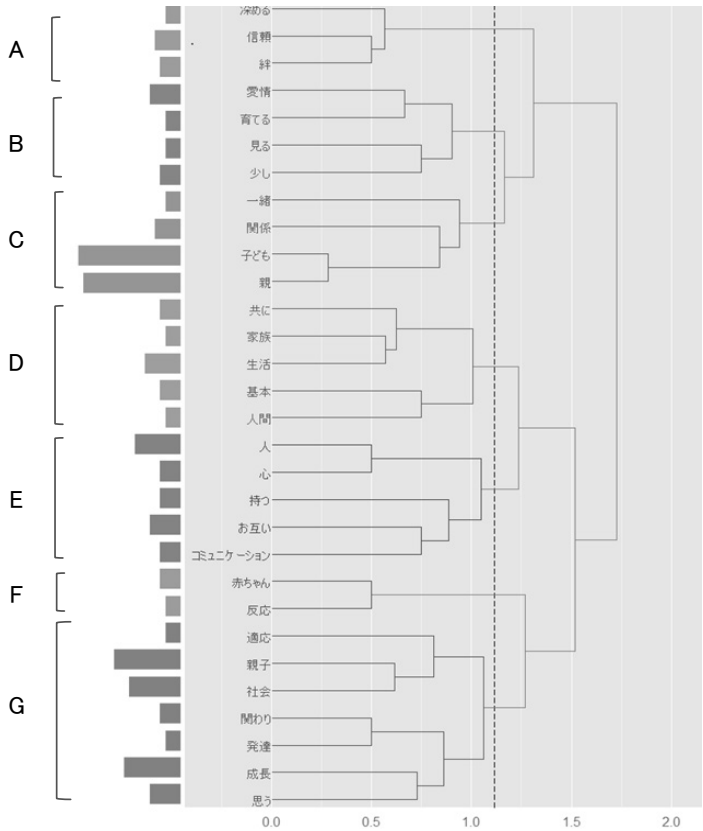

図２　階層的クラスター分析

表５　クラスター分析（Ward法）

A	深める－信頼－絆
B	愛情－育てる－見る－少し
C	一緒－関係－子ども－親
D	共に－家族－生活－基本－人間
E	人－心－持つ－お互い－コミュニケーション
F	赤ちゃん－反応
G	適応－親子－社会－関わり－発達－成長－思う

３．５　共起ネットワークと階層的クラスター分析の共通部分

共起ネットワークと、階層的クラスターを比較検討し、共通部分のまとまりから、６次元のグループに分類することができ、それぞれ抽出語から以下の通りにグループの命名を行った。[愛情ある養育で深まる絆：共起ネットワーク①－クラスターＡ、Ｂ]、[関係の中で親子が育ち合う：共起ネットワーク②－クラスターＣ]、[家族の生活の中で育つ：共起ネットワーク③－クラスターＤ]、[赤ちゃんの反応から親が育つ：共起ネットワーク④－クラスターＦ]、[親子で社会に適応する：共起ネットワーク⑤、⑥－クラスターＧ]、[コミュニケーションにより心が育つ：共起ネットワーク⑦－クラスターＥ]

表６　共起ネットワークとクラスター分析の共通部分

命名		共起ネットワーク		クラスター分析
愛情ある養育で深まる絆	①	「絆」「信頼」「深める」「愛情」「育てる」	A	深める－信頼－絆
			B	愛情－育てる－見る－少し
関係の中で親子が育ち合う	②	「子ども」「親」「関係」	C	一緒－関係－子ども－親
家族の生活の中で育つ	③	「家族」「生活」「共に」	D	共に－家族－生活－基本－人間
赤ちゃんの反応から親が育つ	④	「反応」「赤ちゃん」[思う」	F	赤ちゃん－反応
親子で社会に適応する	⑤	「発達」「関わり」「成長」	G	適応－親子－社会－関わり－発達－成長－思う
	⑥	「親子」「社会」		
コミュニケーションにより心が育つ	⑦	「人」「心」「コミュニケーション」	E	人－心－持つ－お互い－コミュニケーション

４．考察

[愛情ある養育で深まる絆：共起ネットワーク①－クラスターＡ、Ｂ]

子育て支援者は、「親が子どもに愛情を注いで育てることによって生まれる信頼関係、絆を深めていくこと」を親子の成長ととらえて支援を行っていた。親から子へ与えられる愛情が、親子の絆の形成の始まりであるととらえて、親に対して子どもに愛情を注ぐことができるよう親支援を行っていた。

親の中には、子どもに愛情を持って育むことに葛藤を感じる場合がある。要因の一つとして、子どもの育てやすさの問題がある。子どもの中には、睡眠のリズムが整わない、機嫌が悪いことが多い、新しいことに慣れにくいなどの気質を持つ育てにくいタイプの子どもが

いる。そのような手のかかるタイプの子どもを持ったことで、子育てに疲弊して子どもが可愛いと思えなくなってしまう親もいる[23]。また、親の側の要因として、子育て初期の親の中には、「子どもを持ったら自分がなくなってしまった」と、親になることで自己の喪失感を感じる親、「友達の家族やテレビの家族に憧れていたのに、どうしていいかわからない」、「私のような子ども時代でなく、子どもに愛情を注ぎたいと思っていたのになぜかイライラして子どもに当たってしまう」など、ネガティブな感情を経験して戸惑う親もいる。葛藤を持ちながらの子育ては負担感が高く、閉塞感も大きい[24]。初産婦の母親を対象とした調査では、わが子を可愛いと思えることと、親としての有能感とは、最も強く関係しており、親の成長を促進させる要素となっている[25]。全ての親が当たり前に子どもに愛情を注げるわけではなく、それを阻害する様々な要因があることを理解した上で親を支援する必要があり、子育て支援者も親を支援することが親子の成長支援であるととらえている結果となった。

［関係の中で親子が共に育ち合う：共起ネットワーク②－クラスターC］

子育て支援者は、親子は相互のかかわり合いを通して共に育ち合う存在であり、同時に子どもの年齢に応じた適切な距離を広げていくととらえて支援を行っていた。「親も試行錯誤の中から育てる力を身に付けていく」「親は子どもを育てながら自分育てをして成長する」など、親が子育てに取り組むプロセスを通して、子どもが育つと同時に親自身も育ち、親子は一緒に成長する存在ととらえていた。一方で、「適切な段階で親離れ、子離れする」と、親子の成長は、親と子が分離に至るプロセスであるとして、親は「手取り足取りから離れて見守る立場へと子離れすること」、子どもは「段階を踏んで自己を確立すること」、親子は「互いに学んでいくこと」の先に、お互いに「客観的になる」ことが親子の成長であるととらえていた。

M・マーラーら（1987）による乳幼児期の母親と子どもの「分離・個体化の理論」では、新生児から乳児期前半は母親と乳児は一心同体であるが、乳児期後半から３歳頃までの間に子どもは母親との分離を成し遂げ、母親が自分とは異なる存在であることを知り、愛着対象としての母親像を確立していく。M・マーラーはこの分離・個体化の過程を乳幼児の心理的誕生と呼び、同時期に母親もまたわが子の心が誕生するまでの、成長と揺り戻しに伴う葛藤を経験する[26][27]。岡本（1996、2002）は女性の生涯発達におけるアイデンティティの再編成について、「個」としてのアイデンティティの発達・変容と、重要な他者との「関係性」の発達・変容から検討しており、「多くの女性の場合、20代後半から30代半ばまでは出産・育児期にあたり、一つのアイデンティティの葛藤の時期に当たると考えられる。すなわち、結婚・出産までに形成してきた「個」としてのアイデンティティと、新たに母親となることによって獲得されるべき母親アイデンティティが、しばしば葛藤を引き起こす」として「両立、調和させ統合していくことは、現代女性にとって必ずしも容易なプロセスではない」と述べている[28][29]。子どものいる生活に慣れ、親であることがアイデンティティの大きな部分を占めるようになると、子どもは思春期を迎え、親からの「第２の分離・個体化」を果たして親から心理的に分離し[30]、青年期には家から独立する。親は親役割の変化に伴い、ア

イデンティティの再編成を迫られて葛藤を感じる[31]。柏木（1994）は３歳から５歳の幼児を持つ父親と母親を対象に、親となることによって人格的・社会的な行動や態度にどのような変化が生じたかを調査し、「柔軟性」、「自己抑制」、「視野の広がり」、「自己の強さ」、「生き甲斐」など多岐にわたって成長し、父親より母親の変化が著しいことを見出している[32]。根ヶ山（2006）は、「子別れ」の観点から子育てについて検討している。「子育てのゴールが『子どもを社会的単位として自立した個体にすること』であり、そのためには子どもと親が相互に自律的存在となることが目指されるのであって、その意味において『子育てとは子別れ』の道のりに他ならない」と述べている[33]。子育て支援者も、「幼い頃は手をかけ、小学生になったら目をかけ、中学生になったら心をかける」と、子どもの年齢に伴って、子どもとの距離を離していくことが親子の関係の成長ととらえ、乳幼児期だけではない長いスパンでの親子の成長を念頭においた支援を行っていた。

［家族の生活の中で育つ：共起ネットワーク③－クラスターD］

子育て支援者は、「家族として共に生活」することで親子として成長し、「日々の生活の中でお互いに成長しながら家族が完成されていく」と、親子は家族の中で育ち、家族は親子と共に成長していくものであるととらえていた。

カーターとマクゴールドリック（1998）は、夫婦と子どもからなる核家族を、男女が原家族から自己分化して夫婦システムを形成する第１段階から、親になり親役割への適応と子どもの成長の変化への適応、子どもの巣立ちに伴う夫婦システムの再編成と老年期の家族の時期の７つのステージに分類して、夫婦は子どもの成長に伴って子どもの持ち込む世界に親として適応しながら家族として発達すると述べており[34]、子育て支援者の考える家族観も同様の結果であった。本稿の子育て支援者は40代と50代が大半であり、夫婦と子どもからなる世帯の割合が多かった時代に育っていることから、父母を中心とする核家族を標準家族ととらえる家族観を持っていると思われる。現在の日本では、夫婦と子どもからなる世帯は1985年をピークに減少局面に入り、ひとり親と子どもからなる世帯が年々増加し、2015年の統計では４組に１組はひとり親世帯であり、子どもを持つ再婚家族も増加傾向である[35]。子育て支援者は、多様化する家族の姿を理解して、それぞれの家族の中で育ち合う親子にとって必要な支援を提供していくことが求められる。

［赤ちゃんの反応から親が育つ：共起ネットワーク④－クラスターF］

子育て支援者は、「親は何もわからない赤ちゃんの世話をして話しかけてみたりあやしたりするうちに赤ちゃんは親を認識して笑ったり、声を出したりして反応するようになり、それを見た親は嬉しくなってより盛んに赤ちゃんに働きかける」「親は子どもの反応から試行錯誤して子育てをして、修正したりすることで子どもは良い刺激を受け、親も育てる力を身に付けていくのだと思う」と、乳児が親にさまざまな働きかけをして、乳児の状態や要求を感じ取って応えようとすることで親が養育力を高めて親として成長していくととらえていた。

新生児は空腹やオムツが濡れたなど不快な時に泣き、不快感が解消されると穏やかになってまどろむことを繰り返す。親になりたての大人は新生児の泣きに対して、試行錯誤を繰り

返し、泣きが収まることで親としての有能感を高めていく。親は乳児の呼吸の様子や顔色、抱いた時の体温などから健康状態を把握し、表情や行動、発する声の調子や泣き方などから、その時々の欲求や気分を読み取ろうとして関わる。親は自分の働きかけの効果を実感すると親としての有能感が高まり、親として成長していく[36]。子育て支援者も、乳児からの働きかけに、親が自分自身の五感を使って細やかに応答していくことを通して、親子が成長していくととらえていた。親子の育ちの相互作用の起こりにくい親子にはさまざまな支援が必要である。子どもが親にとって育てにくいタイプ、または、親の方が乳児の働きかけを適切に読み取れないなどの場合、親が乳児との関わりに喜びを感じることができず、親としての有能感を持てないままに、育て方が悪いのではないかと自分を責めてしまうことがある。子育て支援者は、関わり方のヒントを提供する、子育て支援者がかかわりの見本を示す、親の適切な関わりをしている場面を承認するなど、親の成長をうながす必要がある。

［親子で社会に適応する：共起ネットワーク⑤、⑥－クラスターG］

子育て支援者は、「乳児の時代の仲間の親子、幼稚園の中での親子、小学校、中学校の中での親子」が、子どもの属する集団に親として属し、「親子が社会に適応していく過程」「親子で社会とのつながりを持ち、社会生活に参加していく」ことを、親子の成長ととらえていた。

親になる前は、学生として、職業人としてなど個人として社会とのつながりを持っている。しかし親になると、親子で社会に参加するようになる。親子で属する初めての社会は、「公園デビュー」などと呼ばれ、地域の公園であることも多い。子どもを連れて公園や、「ひろば（地域子育て支援拠点事業を含む他乳幼児の親子が自由に集う遊び場）」などに行き、子どもを遊ばせるだけではなく、自分の子どもと同年齢の子どもを連れた親同士のコミュニティの一員になる[37]。少子化、きょうだい数の減少で、子どもを仲間関係の中で社会化するためには、親が親仲間を作らなければならない。親たちは子どもの年齢が近いことから知り合った友人を「ママ友」と呼び、子どもに関しての情報交換や相互援助をする。仲間の存在によって子育てが楽になる親は多い。しかし、親子というまとまりで他の親子と交流することに自分自身の仲間関係とは異なる難しさを感じる親も多い。子育ての仲間は、子どもの成長を競う競争相手という側面もあり、仲間の中にいながら、劣等感や孤独感を募らせる場合もある[38]。

近年では「ひろば」に初めて参加することを「ひろばデビュー」と呼ぶこともあるなど、乳幼児と共に訪れる場所として、「ひろば」が認知されてきている[39][40]。「公園デビュー」と「ひろばデビュー」との相違は、「ひろば」には子育て支援者がいて親子の社会参加を支援していることである。子育て支援者は、親同士の仲間作りを促し、子ども同士の遊びを援助し、親に情報提供をする、子育ての相談にのるなどの支援を行う[41]。親子は「ひろば」という社会の中で成長し、子どもが集団に属する年齢になると、「ひろば」を卒業して、保育園、幼稚園などに入園する。「ひろば」での取組みとして、年度末に、４月から保育園や幼稚園に行く親子を対象とした「おめでとうの会」などを企画することがある。親子で一緒

に過ごす「ひろば」から、子どもは親から離れて子ども集団に、親は子どもの社会化を援助しながら、親も園児の親として成長する。親子それぞれが社会からの影響を受けて刺激し合う中で育ち合い、子どもが属する集団が変わっても続く成長の過程である。「最終的には子ども自身が社会で生きていくために必要な技術や習慣を獲得して自立する」と、子育て支援者は、社会化の観点から子どもが大人になるまでを見通して親子の成長を支援していた。

［コミュニケーションにより心が育つ：共起ネットワーク⑦－クラスターE］

子育て支援者は、「互いに信頼しあいコミュニケーションがとれる関係になる」「コミュニケーションの基本中の基本が親子。目と目を合わす、言葉を交わす、触れるといった基本的な関わりからお互いを思いやる心を養う」と、相互にコミュニケーションをとることによって、親子の心が共に成長するととらえていた。

出生直後から、親子は絶えずコミュニケーションを取り合うことで、お互いの結びつきをより確かなものにしていく。A・ゴプニック（2010）は「赤ちゃんは身近な人の感情を真似することで、自分のコミュニケーションの土台を作っている」と、出生直後から始まる親子の間でのコミュニケーションのスタイルが、その後、子どもの社会の中での親以外の他者との間のコミュニケーションの原型となると述べており[40]、子育て支援者も同様にとらえて親子を支援していた。その上で、目と目を合わす、子どもの発信をとらえて言葉をかけるなど、具体的なコミュニケーションスキルを親に伝えるといった援助を試み、親子のコミュニケーションが円滑になるように支援を行っていた。

5．まとめ

子ども広場の子育て支援者は、親子が成長するということを、①親が子どもに愛情を持って養育することから親子の絆が育まれ深まること、②親子は相互のかかわりを通して共に影響を受けながら育ちあい、次第に距離をとり、最終的には互いに独立した存在になっていくこと、③親子は家族の中で育ち、家族は親子と共に成長していくこと、④乳児からのさまざまな働きかけに対して、親は乳児の状態や要求を感じ取って応えようとすることで養育力を高めて親として成長していくこと、⑤子どもの属する社会に親も属し、親子で成長し、親子の単位で社会に適応すること、⑥親子相互のコミュニケーションによってお互いの心が育っていくこと、の６次元で捉えていることが明らかになった。親が子どもに愛情を持って子どもからの働きかけに応じることから、相互作用が起こり親子がお互いに育ち合う。育ち合いの内容として親子で社会に適応していき、最終的にはお互いに自立した存在になることであった。

大豆生田は、親が親として育つためには、早期の母子関係や家族関係への支援が必要であると述べており、「ひろばなどに集う事は、単に親子が安心できる場として機能するだけでなく、同じくらいの月齢や年齢の子どもの発達やその親のかかわりを見たり聞いたりする場でもある」と、「ひろば」が、学び合いすなわち成長の機会となると述べている[41]。また、筆者ら（2014）は、子ども広場を利用する親にとって、「子育て支援者が、短期的スパンと

長期的スパンの両面からの親の成長を念頭においていることによって支援がさらに有効に機能する」と、親の成長を支援する場としての「ひろば」の機能について述べている[42]。エリクソン（1950）は、成人後期の心理社会的危機を、世代継承性（generativity）（次の世代を確立させ導くことへの関心）として次世代とかかわることによって成人としての自己が活性化されることであり、「相互性（mutuality）」として親子は育ち合う関係であると述べている[43]。子ども広場の子育て支援者も、親は子育てを通して成長し、親子は共に育ち合う関係であること、乳児期から、子どもが親から独立するまでの長いスパンで、親子の心の育ちと、親子の社会化をうながす視点を持って支援を行っていた。

６．今後の課題

本稿では、親子が成長することを子育て支援者がどのようにとらえて支援しているのかを調査し、６つの次元から検討を行った。調査対象が限定されており、また対象の子育て支援者の数も少ないため、結果を一般化することは難しく、子育て支援者の特性として言い切ることは困難である。今後、対象者数を増やし、より一般化できるような詳細な調査分析を進めていく必要がある。また、本研究は質問紙による調査であったが、今後はインタビューによるより詳細な聞き取りを行う、あるいは他の地域子育て支援拠点事業の子育て支援者の調査との比較など、調査対象や調査方法についても検討する予定である。「子ども・子育て支援新制度」では、地域子育て支援拠点事業（ひろば）の質・量の両面の拡充が図られることになった[44]。今後ますます乳幼児の親子の社会参加の場としての「ひろば」が重要な役割を果たすようになり、それに伴って子育て支援者の果たす役割も大きくなり、専門性が問われるようになってくると思われる。今後は、子育て支援者に共通する親子観、成長観をさらに詳細に検討し、子育て支援者の専門性について、検討していく予定である。

謝辞

本研究を進めるにあたって調査の場を与えてくださったＡ市社会福祉協議会、調査にご協力くださった子育て支援者の方々に厚く御礼申し上げます。

[注]

［１］大日向雅美,『母性の研究－その形成と変容の過程：伝統的母親感への反証』，川島書店，1988年
［２］塩崎尚美,「発達　子ども虐待の現状と支援」，No.117，Vol.30，p32-39，ミネルヴァ書房，2009年
［３］総務省「総務省情報通信白書平成26年度版」「第１部第１節ICTの進化によるライフスタイル・ワークスタイルの変化」（www.soumu.go.jp　2015年９月20日アクセス）
［４］全国保育者養成校連絡会,「第54回研究大会実施要綱2015年９月」，p30，2015年
［５］厚生労働省,「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について平成６年12月16日」，1994年
［６］厚生労働省,「新・エンゼルプランについて平成11年12月19日」，1999年
［７］厚生労働省,「少子化対策プラスワン（要点）平成14年９月」，2002年

［８］厚生労働省，「次世代育成支援対策推進法（概要）」，2003年
［９］厚生労働省，「子ども・子育て応援プラン」，2004年
［10］内閣府，「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）レポート2011～新しい働き方で拓く。つながりのある日本社会～」，2011年
［11］内閣府，「子ども・子育てビジョン～子どもの笑顔があふれる社会のために～（平成22年１月29日閣議決定）」，2009年
［12］田中麻里，「日本における子育て施策の変遷－『エンゼルプラン』から『子ども・子育ビジョン』まで－」，「西九州大学こども学部紀要」，２，p77-85，2011年
［13］内閣府ＨＰ，「子ども・子育て支援新制度」，（www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/　2015年９月20日アクセス）
［14］厚生労働省ＨＰ，「地域子育て支援拠点事業とは（概要）」（www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf　2015年９月20日アクセス）
［15］大豆生田啓友，『支え合い、育ち合いの子育て支援』，p36，関東学院大学出版会，2007年
［16］太田光洋，「“子育て支援”とは何か－子育て支援センター活動へのかかわりを通して－」，「保育の実践と研究」，Vol.６，No.４，24，p13，相川書房，2002年
［17］前掲書［15］，p42
［18］前掲書［15］，p51
［19］岩堂美智子監修・松島恭子編，『臨床心理士の子育て支援その理論と実践事例』，ｐ１創元社，2008年
［20］那須川知子・清水憲志，『子育て支援の理論と実践』，ｐ２-３，ミネルヴァ書房，2013年
［21］樋口耕一，「ＫＨcorder」，（http://khc.sourceforge.net　2015年９月１日アクセス）
［22］樋口耕一，「テキスト型データの計量的分析　－２つのアプローチの峻別と統合－」，「理論と方法」，19（１），p101-115，2004年
［23］森下順子・森下正康，「幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響」，「和歌山大学教育学部紀要」.「教育科学」，56，p43-50，2006年
［24］丸谷充子，「子育て支援における親の生涯発達支援の意義－親としてのアイデンティティの統合」，浦和論叢，（50），p133-147，2014年
［25］丸谷充子・中島洋，「出産直後の母親の心理構造」，「第20回埼玉県母性衛生学会大会学術講演会プログラム抄録集」，p28，2003年
［26］マーラー .M.S.・パイン.F・バーグマン.A［髙橋雅士・織田正美・浜畑紀訳］，『乳幼児の心理的誕生（*The Psychological Birth of the Human Infant*）』，黎明書房，1987年
［27］氏家達夫，『親になるプロセス』，金子書房，1996年
［28］岡本祐子，「育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究」，「日本家族学会誌」，47-９，p849-860，1996年
［29］岡本祐子，『アイデンティティの生涯発達論の射程』，ミネルバ書房，2002年
［30］ピーター・ブロス，［野沢栄司訳］，『青年期の精神医学』，誠信書房 1971年
［31］兼田祐美・岡本祐子，「ポスト子育て女性のアイデンティティ再体制化に関する研究」，「広島大学心理学研究」，７，2007年
［32］柏木恵子・若松素子，「『親になる』ことによる人格発達：生涯発達的支援から親を研究する試み」，「発達心理学研究」５-１，p72-83，1994年
［33］根ケ山光一，『〈子別れ〉としての子育て』，日本放送出版協会，p209，2006年
［34］Carter&McGoldrick，*The Expanded Family Life Cycle：Individual, Family, and Social*

Perspectives，Allyn＆Bacon，1998年
［35］国立社会保障・人口問題研究所，「日本の世帯数の将来推計(2014年推計)」，2014年（www.ipss.go.jp　2014年９月１日アクセス）
［36］ダニエル・N・スターン/ナディア・B・スターン/アリソン・フリーランド［北村婦美訳］，『母親になるということ 新しい「私」の誕生』，創元社，2012年
［37］大野正人・服部勉・進士五十八，「乳幼児連れの母親の公園利用実態からみた公園デビューに関する一考察」，「ランドスケープ研究　日本造園学会誌」61（５），p785-788，1998年
［38］丸谷充子，「子育てに負担を感じている母親へのコラージュを導入したグループの試み」，「放送大学大学院教育研究成果報告７」，p152-153，2010年
［39］松永愛子，「親子の『主体性』を育む『地域子育て支援センター』におけるスタッフの援助実践－他者性の変化の過程における『居場所』の機能－」，「目白大学総合科学研究」，10，ｐ９-22，2014年
［40］アリソン・ゴプニック，『哲学する赤ちゃん』，亜紀書房，2010年
［41］前掲書［15］，p50-51
［42］丸谷充子・田中康男・中島悠介，「子育て支援者の考える親の成長－つどいの広場の子育て支援者へのアンケート調査（１）－」，「地域福祉サイエンス創刊号」，p21-30，2014年
［43］E．H．エリクソン，［仁科弥生訳］，『幼児期と社会１（*Childhood and Socity.Norton. 1950*）』，みすず書房，1977年
［44］前掲書［13］

Summary

Growth of Parent and Child from the Perspective of Childcare Supporters
— Through the Questionnaires to Childcare Supporters at Child Open Space —

Mitsuko Maruya

Speaking of childcare supports, supports for both parent and child are necessary. In order to guarantee the effectiveness of childcare support, childcare supporters have to play a significant role. Therefore, this report examines the ways of supporting childcare supporters by searching out how childcare supporters at Child Open Space, one of the "area child-raising support base business", perceive growth of parent and child.

In terms of the analysis of data, KH Coder (Ver.2.Beta.30f) by Higuchi (2011) is used. It is examined that childcare supporters perceive growth of parent and child with regards to the following 6 dimensions; "deepened bond by affectionate nurturing", "mutually bringing up in relationship", "growing up in the family life", "growth of parent from the reaction of baby", "adapting to society together", "growth of heart by communication". Also, it is revealed that their supports last for a long term, from infancy to the time when a child gets independent from parents.

Keywords Area Child-Raising Support Base Business, Childcare Supporter, Parent and Child' Growth, Childcare Support, Text Mining

(2015年11月12日受領)